特別講演

『外から見た国有林』

講師　東奥日報社
論説委員　菅　　勝　彦

只今ご紹介していただきました東奥日報社の菅でございます。専門家の前で専門の話をすると言うのは我々に取って鬼門でありまして、例えば農業関係者の方が、農業の話をしてくれという場合にはなるべく断ることにしています。だいたいそういう場合は「新聞記者ってこの程度かー」と笑われるのが落ちでありますから、なるべくはそういう場所には行かないことにしているわけです。専門以外の話、つまりこちらの土俵で相撲を取るのが我々の考え方でありまして、今回営林局さんから「何か林野の話をしてほしい」という話があった時「まずいな」と思いました。しかし『外から見た国有林』という演題であったので、まあそれなら多少トンチンカンなことを言っても許されると思いお引き受けをした次第であります。

私は昭和４３年、十勝沖地震の時に東奥日報社に入社し、社会部がスタートであります。マスコミ関係者はだいたい硬派と軟派に分かれておりまして、社会部関係は軟派、政治経済関係は硬派と言われておりますが、私は軟派の出身で、その後どっちかというと硬派の方が長く、現住所は硬派、本籍地は軟派ということになります。元来、私は軟派な人間ですから大所、高所の議論をするよりは、社会的な様々な出来ごとを追っかけている方が向いているという気がしています。

営林局とのお付き合いは、政経部に在籍していた昭和５１～５３年の３年間で、会社は何を勘違いしたのか「農林を担当しろ」ということでした。全く農業、林業を知らない私が農林業を担当するという羽目になりまして、

今は森林博物館になっている元の営林局庁舎に結構取材にお邪魔しました。その時の広報担当者は佐々木さんと加藤さんで、加藤さんは旭川の出身でありました。私と同郷ということで特に親しみを感じながらお世話になり、林業のついて多少触れた程度です。その後農林関係者とのお付き合いは殆どなくて、１５～１６年ほどご無沙汰しておりました。ところが、先ほどご紹介していただきました白神山地に関するシンポジウムを開催するに当たり司会役が必要なので「お前がやれ」という話が県から来まして、本当は断った方が良かったかもしれませんが、成り行き上承諾してしまったために改めて白神山地について勉強をすることになりました。政治経済関係を担当している時も白神山地についての経緯は外から見ていたわけですが、改めて勉強してみると外から見ているのと違い、かなり複雑なモノがあるという感じを受けました。

思い出話になりますが、以前に営林局とお付き合をしていたころ、どこか東奥日報社に対して批判的な雰囲気があったと記憶しています。それは、当時は国有林の解放問題が言われていた時期で、青森県の知事がその運動の会長としてかなり運動をしていた時期でもありました。私が入社する前に相木という先輩が「国有林を見直そう」というキャンペーンをはって新聞協会賞という新聞社にとっては最高に名誉な賞をいただいたという経緯がありました。それに対して営林局側では「違うぞ」という気持ちがどこかにあったのではないかという気がしました。そういうことがずっと尾を引き、何とはなしに東奥日報社に対し、ちょと冷たい感じがありました。しかし、その後は大変お世話になりまして、むつ営林署のヒバ施業個所やヒバ埋没林を見せていただいたり、さらには金木営林署のヒバ、八甲田のブナ二次林等も見せていただき、少しは林業についての知識を得たような気がしました。

当時、特に印象的だったことは植林してから伐採するまで杉で４０～５０年かかるとうことでした。あのころは高度成長の時代だったので４０～５０年の長いスパンで物事を考えるというのはどうもピンと来ませんでした。また、極めて単純な発想で、植林をして儲かるのかーという質問をしたところ「金利を考えると儲かりません」という回答でしたので、金利が高かったにせよ林野行政は大変なことと感じたことを思い出しております。

先ほど白神山地の世界遺産登録記念シンポジウムのことをお話をしましたが、そのころ入山規制について賛否両論があったので実は言葉は悪いですが司会を引き受けるのは「やばいかな」と感じました。本来は世界遺産登録記念ですから「めでたし、めでたし」のお祭りで済むはずのシンポジウムでありますから「良かった良かった」といってこれからの方向を議論すればいいようなシンポジウムのはずですが、どうも周りが何かと騒がしい中で私が司会をやって、どちらかに組みしていると受け取られてもまずくなることは勿論、東奥日報社が入山規制派だとか、自由に入山させるべき派とかの印象づけをもたれると後々まずいことになるのは目に見えています。それなのに根がオッチョコチョイなものですから言われればその気になって引き受けてしまいました。こうしたことが今まで私の間違いの元となって来ました。

そんなこんなで、１５年ぶりに改めて林野に関心を持ったわけです。白神山地は平成５年の１２月８日（現地時間）に登録が決定したのですが、登録決定の前の月に県が白神山地管理運営計画検討委員会を設置し、例の保全利用基本計画案を出したのです。登録決定する時に未だきちんとした計画が出来ていない、まさしく泥縄式であったのです。なぜかというと、県としては割りと単純に考えていたようですが、ユネスコ本部からきちんとした保全利用の計画もなしに世界遺産のまな板にあげるわけにいかないというご指摘がありました。それで県が泥縄式に計画を作ったという経緯であったようです。それに対して計画の中身が県の独自色が出ていないとマスコミは批判的でありました。つまりはマスコミというのは自分で手を汚さないし、別に自分が苦労していないから、出て来たものに対して、ああだ、こうだと言っていればよいという面もあって県の苦労などお構いなしに国が線引きしたとおりでないかと批判的でした。

それはともあれ白神山地と一言で言っても全体で約１３０千㌶で、青森県側が８４千㌶、秋田県側が４６千㌶となっています。しかし、白神山地と言えば県外の人は秋田県の山であるという意識が強いようです。秋田県側は面積的には少ないけれど自然保護団体の動きが良いことから情報発信が秋田県側が盛んであることから、何となく秋田県のイメージが強くて、白神山地は青森県にもまたがっているんですかーということになっている

ようです。そういうところにも青森県側の問題点があると感じています。

世界遺産もユネスコからもう少しその範囲を広げるよう要請を受け、結局は約１７千㌶を世界遺産の対象区域にしたのです。この時も青森県側が約１３千㌶で秋田県側が４千㌶でありますから世界遺産の網をかぶった部分というのは青森県側が極めて多いのです。これには林野の森林生態系保護地域（１７千㌶）と環境庁の自然環境保全地域（特別地区７．４千㌶・普通地区２．３千㌶）の二重の網がかぶさっています。これに対して青森県で作成した保全利用基本計画であらためて四つに色分けしたのです。その内訳は保護保全ゾーンが約７．７千㌶、研究学習ゾーンが約２．３千㌶、利用体験ゾーンが１３千㌶、文化生活ゾーンが６１千㌶とし、この保護保全ゾーンについては、最も厳正に守っていくといういわゆる特別地区に色分けをしたのですが、林野庁及び環境庁が色分けしたのを下敷きにして線を引いているわけで当然独自性がないのです。しかし、私どもから見れば県はそのようにせざるを得ないというか、県がそんなに権限をもっていないことから上部機関である林野庁なり環境庁が線引きしたものに対して県が勝手に別の線を引くというのはなかなか難しいことで仕方がないことだと私は思っています。これは県から聞いた話ではないので違っているかもしれませんが、その時ちょっと気になったことは県が設定した白神山地管理運営計画検討委員会に県の方では林野庁と環境庁にも参加していただきたいとお願いをしたところ双方とも入らないということで参加してもらえなかったという話を取材した記者からは聞いています。そのことがあって県はますます林野庁なり環境庁が引いた線からは出られなかったのではと思っています。また、違っていれば後で訂正しますが、先程述べたとおり林野庁が参加しなかったとすればそれはきっと林野庁としては自分の独自性を担保しようという気持ちがどこかにあったのではないかという気がします。

その後、世界遺産に登録され「良かった、良かった」ということになったんですが、その時期に営林局が森林生態系保護地域の保存地区について入山禁止の看板を立てたということで、にわかに県論がやかましくなって来ました。そういう状況下において例のシンポジウムが開催され、その時のテーマが「保全と利用」でした。「厳正な保護」と「賢明な利用」とい

うことで、厳正に保護しながら賢く利用するという実に素晴らしい文章で、さすがに頭の良いお役人が作った文章であると感心しました。この二つのことをどう両立させるのかーがテーマでありました。まさしくこれは素晴らしいテーマでありますけれど、考えてみると極めて難しいテーマであり、厳正な保護と利用という鋭く対立する二つの概念を掲げて議論というのは難題であります。私が恐れたのは入山禁止に対する営林局批判がドンドン出て来て、それで終わってしまうことです。それではこの問題を避けて世界遺産登録になって「良かった、良かった」で終ることができるのか。県論が熱くなっている時これを避けて議論することもできません。どのようにバランスをとったら良いのか悩んだわけです。登山家、女性ら６人のシンポジリストがそれぞれの主張をされました。普通はシンポジウムを開いても会場からの意見がなかなか出てこないもので、時にはその後の議論を期待して何人かのサクラを立てるといった手段をとることもありますが、あの時は全くそれなしに、次々と手が挙がり結局１０人の方が発言されました。意外だったのは取材に来ていた新聞記者まで手を挙げました。これは一種のルール違反で新聞記者があの様な場所で意見を言ってはいけないことになっているのですが、我慢出来ずに立ち上がって意見を述べました。非常に異例な面白いシンポジウムでありました。皆さんもご承知のように、登山家の方は山と地域社会はこれまでずっと触れ合いながら生きてきたのであって、入山禁止というのは山の文化そのものを圧殺してしまう恐れがあるという意見でした。また、マタギの方で今レンジャーなさっている方は、入山者が増えてマナーも悪く、このままでは自然が破壊されてしまうからガイド付きで入山させるべきだというご意見でした。さらに、橋岡森林管理部長は、遺伝子バンクとして厳正に保護する責任があるというお話をしていたように記憶しています。

あの時は議論が色々と分かれましたが、私は地元の人たちは世界遺産になるまでの色々な経緯が頭の中にあって、それらを下敷きにして話をしているのではないかと感じました。それに対して営林局側は論理的な整理をし、これはこう決まったのだからこのように保護しなければという論点で話をしているように感じられました。そこに微妙な立場の違いのようなことが生じていると感じながら意見を聞いていましたが、話をどこに着地さ

せるのか苦労をしました。色々な論議を聞きながら、結局は過去や経緯に対する共通理解を抜きにしては議論が噛み合っていかないのではないかとしきりに考えておりました。

さらには約１７千㌶の世界遺産地区だけの議論をしても、地元の人たちは１７千㌶の周りの部分についても同じ白神山地としてみています。白神山地の全体を見ながら議論していかないと地元の人と行政側との意見がどうしても噛み合っていかないと感じました。また、あの場では林野庁の経営体としての姿、つまり林野行政というのは独立採算で運営されているということをほとんど理解ないままに議論がなされていると感じていました。今度の遺産登録というのは外務省、文化庁、環境庁、林野庁の４省庁が絡んでいますが、登録まではユネスコ関連で外務省が出てくるだけで、具体的には文化庁、環境庁、林野庁であり、それぞれのスタンスが全然異なります。文化庁と環境庁は自然を守ればよいわけですが、林野庁はそれだけでは済まない。そういうことをほとんど理解せずにものを言ってもなかなか意見が噛み合うあずがない。そんなことも感じながら話の展開を聞いていました。守ることももちろん大事なことですが、守るにも利用するにもコストもかかるのだというコスト意識がないままに議論が進んでいると感じていました。それで議論の方向を変える意味もあって、白神山地のブナ原生林は聞くところによれば約８千年の歴史があり、いま話題の三内丸山遺跡は４～５千年位だと言われている。白神山地はその２倍の歴史を持っていることになります。その白神山地をどう保全し利用したらよいのかということをを慌ててここ半年、一年で急ごしらえする必要がないと思います。議論することは大いに結構ですが、感情的になったり拙速に走る必要がないのではないか。８千年の資産を守ることですから、もっとじっくり考えるべきではないだろうか。また、議論がどうしても熱くなっていますから、頭を冷やすというか、論点を整理しながら議論をしていくための場が必要であると考えました。当時、成田闘争で円卓会議ができ、それが解決に向けての一つの糸口になっていったので、白神山地についても円卓会議のような場を設け、広く意見を求め、ゆっくりと議論をしたらどうでしょうかという提案で結んだのでした。営林局側からは言いにくいのでしょうが、コストについても県民の皆さんにもっと知っていだかないとまずい

のではないかと思います。営林局が赤字なので営林署を統廃合するというと、必ず地元は統廃合しないでくれと言います。一方では赤字を減らせと言うというのがこれまでの状況であります。それぞれに立場があるからやむ得ないとも考えますが、しかし、コストについて県民の皆さんに知っておいていただく必要があると考え、その後改めて取材にお邪魔し、昨年１１月に社説として書かせていただきました。

その内容は林野行政の財務関係についてであります。これは皆さんの方が詳しいかと思いますが、私が理解した林野行政というか、外から見た林野財政という程度のものです。私はかつて林野財政が独立採算制だということを知り、てっきり大蔵省から押し付けられたもので林野庁がいやいや独立採算制をとってきたのだと勘違いしていました。ところが、そうではなくて、戦後日本の復興のために木材の需要が多くて林野庁が潤っていて、それをドンドン一般会計に繰り入れておったので、これではたまらないと独立採算性にしてほしいと林野庁から要請して独立採算になったと今回の取材で知りました。これは意外でもあったし、歴史というのは非常にドラマチックに変わっていくものだなと感じました。

青森営林局は優等生であったようで、全国の営林局の中では経営的に優れていると当時聞かされていたように記憶しています。このところは赤字続きで、昨年度の青森営林局は支出の超過額が８６億円だと聞きました。また、全国１４営林（支）局の赤字額の債務残高が２兆９千億円で、今年度末には３兆１千億円にもなると聞き大変だと思いました。そんな状態でどのように林野の経営をしているのかと極めて単純な質問をしてみたのですが、昨年度の決算説明では、収入が６，２１３億円でその５６％が借入金であり、また、支出の４３％は借金の返済に当てられ、その額は人件費より多いとのことでした。人件費以上の額を借金の返済に当てているというのは普通ならばもう破産であり、改めて国有林の財政事情の厳しさを痛感しました。それほど厳しいので血が滲むというよりも骨を削るような経営の合理化をやりましたーという話でした。伺ってみると昭和５８年度に７．４千人いた職員が昨年度末には２．９千人になったとのことで血が滲むどころか血を吐くような努力をして現在があるということを今回初めて勉強させていただきました。しかし、外から見ていると林野というのはた

だ木を切って売っているという部分しか見えなく、森林の持っている公益的機能については私たち住民レベルではほとんどわかっていないのが現実であると思っています。国有林は国土保全あるいは水源かん養機能をもち、青森営林局管内９１万㌶の内５４㌶が１７種類の様々な保安林で網がかかっていますよね。そこでは全て木を伐ってはいけないとうことではないでしょうが、たくさんの網をかけて公益的機能を果たしていることを理解しないで議論をしているように思われました。また、森林がもっている公益的機能を金額に換算してみると３９兆円ということだそうですが、理解の外というか想像もつかない額になるという話でして、そういう恩恵を私たちは知らず知らずに受けているのだということも一般的に理解してもらう努力が必要であると考えます。

林野に関わっている人にとっては当然でしょうが目が山に向いていて、財政と山との関係がどうなっているのかについては国民に知らせようとする努力がいま一歩ないのでないかという気がします。お伺いすると色々な資料をいただきますので様々な広報資料もあるのだということはわかりますが、我々マスコミ関係者でもさえ見る機会が少ないのですから、まして一般の人たちはそんなに触れる機会がないではないかと思います。林野がどういう形で運営されているのかを理解してもらう努力が結果的に十分でなかったのではないかという気がします。私の勘ですから間違っているかもしれませんが、そういう努力が不足していたとすれば、なぜそうなったかー。私が思うには林野が赤字経営でもその不足分は一般会計から繰り入れる仕組みになっており、つまりは国民一人ひとりからはお金をいただいいているわけでない。結局は大蔵省が理解さえすれば金は入ってくるのですから、経営の難しさについての理解を大蔵省等に説明をし、理解を得て予算措置を講じてもらえばことで事が済んできいたので、国民にあまり目を向けずにきたのではないかと思っています。話は飛びますが、農業の問題にも共通します。例えば米ですが、理念米価で、別に市場でどう取引されようと関係なく生産費所得保障方式という理念で米価が決まります。ですから、農家はむしろ旗を立てて農水省や米審にアップを要求すればよいという図式で今までの米価闘争が続いてきました。国民というものがどこかで抜け落ちて、常に農水省なりそのバックにある自民党に圧力をかけさ

えすれば何とかなるという構造で長年やって来ました。その結果、消費者との間が今も農家とがギクシャクしております。これと似た事がひょとしたら林野行政にもあって、国民に対するＰＲが不十分になったのでないかと思います。ＰＲというと何となく一方的に勝手なメッセージを押し付けるというイメージを抱かもしれませんが、実はそうではありません。パブリックリレーションでありますから公衆との関係を理解してもらうのがＰＲの本当の意味であります。林野においても山（林野庁）と国民がどういう関係にあるかを知ってもらうための手段としてＰＲ活動が必要であり、そういう努力をして行かないと、例えば白神山地の論議のように微妙な食い違いが生ずることになります。

ＰＲするにあたって大切なことは、地元の住民意識というか、あるいは意識化されていない感情に対する想像力を持つことが大事であると考えます。皆さんは「山役人」という言葉はあまり好きでないかと思いますが、そういう言い方が現実として現在も通用しており、地元の人が「山役人」という言い方をするのはどういう場合なのかを考える必要があます。特に山村の人たちは山と共に何百年も生きて来たという歴史があって、極めて親密な関係にあります。ですから林野行政に対する感情というのは愛憎相半ばというほどではないかもしれませんが、愛情が８～９割で、あとの１～２割が憎しみに似たものがあるのではないでしょうか。その愛情が８割、憎しみが２割だとすれば、その２割の部分に対して想像力をもっていないとまずいではないかという気がするのです。

地元の人たちはブナ林の下にたくさん落葉が堆積しているように、山とともに自分のおやじもおじいさんも生きてきたということで山と関わる記憶や思い出がたくさん降り積もっていると思います。例えば藩政時代の藩林などを官林に編入するということが明治のころにあったわけですね。青森県はその当時１１２．７万㌶がいわゆる官林となり、民有林は１４．１万㌶しか残らず圧倒的に国有林に変わったのでした。これについては様々な経緯があったようですが、昔の資料を見てみると「維持出来ない、税金も高くなりそうだ」ということなどから山を維持できなかったようです。それは青森県の貧しさからきているという気がします。実際に市町村が山を管理しても山が荒れてどうもうまくいかなく、仮に民有林として持って

いたにしても色々と問題があったことも間違いないことでしょう。しかし山村の人には山を取られたという意識がどこかに残っており、それが意識の底に流れているように思います。実際にあったとは思いませんが次のような逸話が残っています。畑がありまして、畑地の境界に木を三本植ていたところ官林編入の時に木が二本なら林であるが、木が三本あるからこれは森であるとして畑地丸ごとを取られたというものです。実際にあったとは思いませんけれどもそういう話が話として残っているところに住民感情の複雑さがあるのではないかと思います。また、営林局の前身である青森大林区署ができたのは明治１９年で、当時は盗伐が多くあったようですね。記録によれば明治２１年に１８５人の検挙者がいて、明治２２年には３９５人、明治２３年には５５５人と年々盗伐が増え、検挙者数が全国一だったそうです。このことを見ても地域住民の貧しさというものが根底に流れていたものと思われます。そういう状況下において多くを官林に編入することを許しながら、どこかに被害者意識をもち続けてきたのではないかという気がします。そういう記憶も地域住民の中にあり、そのことに対して想像力を働かせていかないと思いがけない感情の行き違いが生じてくるのではないかという気がします。

白神山地についても秋田県側の人たちにとっての白神山地と青森県側の人たちにとっての白神山地では少し性格が違うのではないでしょうか。青森県側では古くから利用してきたという歴史がありますから山に入る道もたくさんあり、１箇所止めれば全山保存出来るというようにはいかない山であります。このことから言っても青森県人にとっての白神山地と秋田県人にとっての白神山地のとらえ方が違うということを前提にしておいた方がいいのではないかと思います。また、青森県側の方が感情的になっている背景を見ますと結局は林道を計画したのは営林局で、それに対して様々な意見が出て林道計画を断念したという経緯をみてきましたから、今度は入山規制するというのは「何んだ」となるのです。営林局側では「確かにそういうことはあったけれども今はこのように考え方が変わって保護の網がかかり、こういう方向になったんだからこうなるのだ」ということでしょう。話は極めて論理的ですが、住民はそういうことはさておいて「林道を作ろうとしたのは誰なんだ」と言っているように見えます。そういうと

ころに微妙な行き違いがあるのだという気がするのです。

それからもう一つは、保護地域ということで線引きし、その内側については厳正に保護しますと言っておきながら、その周りで木を伐っているではないかという話になっています。これに対して、営林局側は線を引いたんだからその中は保全するが、他については適切な施業をしていくという、これまた論理的には当たり前のことを言っているのでしょうが、住民や登山家、さらには自然保護団体の人にとってみると「そうもいうものではないだろう」となってくるわけです。しかし、どこでどう線を引こうと必ずそういう問題は起ると思いますが、様々な議論の行き違いが生ずていると思います。先ほど述べたとおり白神山地だけではなくて国有林全体がその地域おけるそれぞれの過去なり記憶の上にあるということを十分認識しておく必要があると思います。そんなことなども今回の色々な議論を聞きながら考えさせられました。そうしたこと対する想像力を欠くとつまらないあつれきになるのではないかと考えます。

先ほど営林局の人は山ばかり見ているという話をしましたが、非常に山を愛するという純粋さがあって、財政的には大変な状況下にあっても自分たちは山を守っているのだという気持ちは尊いのですが、そういう一種の純粋さが持っている危なさも併せてを感じます。その純粋さのゆえに落とし穴に落ちやすいという気がします。例えば自分たちは正しいことをやっているので、先ほど申し上げましたようにＰＲなんかは必要がない－ということになりかねません。これから５０年、１００年、２００年と先々を考えながらしっかり山を守っているのだという気持ちが強くて、いまさら一般国民、住民にＰＲする必要なんてないという考えが仮にあるとすればまずいと思います。国民の意識や住民の心理を見ようとせず、山だけを見ているのではないのかという気がするのです。林野行政は山と対話しながら、山とコミュニケーションをとりながら展開されていると思いますが、その熱心さと同じくらいとまではいかないまでにせよ、その半分でいいから山の下に住んでいる地域住民、県民、都市住民との対話をし、コミュニケーションを図っていただきたい。特に都市の皆さんは、都会は砂漠で気持ちがささくれ立ってしまうが山の緑は美しく山を見ると心が安らぐので「山に帰りたい」とか「山を守れ」と言っています。しかし、山を守るに

はそれなりのコストが掛かるということをあまり理解しようとしないで”正義の味方・月光仮面„のように「守れ守れ」と叫んでいるように映ります。そのことによって守られた自然も多いかもしれませんが、しかし、我々地元から見るとちょっと感覚が違うのではないのか、あるいはやや勝手な議論ではないかと思うこともあります。

これらのことから都市住民に対するＰＲなり、山を理解してもらう活動を日ころから積み重ねていただきたいのです。それが今回の白神山地の問題にしろ、林野財政の問題など様々な林野に関する問題が出た時にキチンとした議論ができ、その中からより良い方向を見出だし得る下地ができるものと確信しております。